

テーマ

難民キャンプにおける支援のあり方や問題点に対する、人々へのエンパワーメント（教育支援や職業支援、自立性の確保など）という観点からの検討。

難民キャンプで生活するカレン民族の人々に対して、地域に根付いた最も身近な支援を行う CBO（Community Based Organization）に焦点をあて、難民の人々の自主的な取組みを研究する。

研究方法

テーマに従い、キャンプ委員会（C.C）、カレン女性機構（KWO）、カレン青少年機構（KYO）を対象にインタビューを行う。

研究内容

1. 難民キャンプの自主的な運営に携わるキャンプ委員会へのインタビュー

<インタビューを通して知りたいこと>

- 難民自身による自主的なキャンプ運営に関して
- キャンプ委員会から見たキャンプの現状、問題点
- CBO の果たす役割
- 学校外教育への取組みについて

<インタビュー結果の概要及び備考>

難民自身による自主的なキャンプ運営に関して

難民自身による自主的なキャンプ運営がされるようになった背景は、多岐に渡る問題の解決のためによりよいマネジメントが求められたからであり、実際、キャンプ委員会の働きにより多数の NGO や CBO など各組織間の連絡・接触が容易になり、以前よりスムーズにコミュニケーションが図られるようになったという。

キャンプ委員会の大きな役割は、難民の人々 CBO NGO、MOI 等間の調整であると考えられる。

タイ政府の難民キャンプの管轄機関である Ministry of Interior（MOI）との関係であるが、キャンプ内で何か問題が発生した場合に報告を受け、解決するのが MOI のはたらしきであり、運営そのものは専らキャンプ委員会に任されている。MOI はキャンプ運営の監督機関として位置づけられている。

難民自身がキャンプの運営に参加し始めたというよりは、難民自身が主体的に運営をしている状況であると思われる

キャンプ委員会から見たキャンプの現状、問題点

キャンプにおいて、難民の人々には人権がない状態だと言う。というのも、キャンプにずっととどまらなければならず、外への出入りは制限されており、また供給される食料についても、米や豆など種類のにも、量的にも、非常に限られており、十分ではないからだ。ただし、NGO に対して必要な支援を要求し、応じてもらってきたので、建物、資材、文具など必要なものはかなり行き渡っている。今後望むものはコンピューター設備の供給である。

キャンプ外への出入りが制限されている点、食物が限られている点で、特に人権が保障されていないと感じられる点のようである。

現在長期化しているキャンプ生活については、MOI、NGO、難民同士が互いに理解しあい、活動していければ特に大きな問題はないとの認識である。本国への帰還や第三国定住については、キャンプ内で学校教育を終えた人であれば、どちらの場合にもキャンプ外の生活に十分適応できるであろうと考えられている。

現在はキャンプ内で難民の人々と、支援団体がよい関係を築けており、教育制度もある程度整っていると考えられているようである。

人権という点から考えて、将来的により自立した生活を送ることは難民の人々にとって非常に重要である。しかし、そのためにはキャンプの外で活動する機会がもっと必要である。以前と比べれば、支援をただ待つだけではなく自ら活動しており、教育も整ってきていて、確実に状況はよくなっている。自給自足に近づくために今後、NGO など各組織に、難民自身の意見や要望を聞き入れてもらうことが大切だろうと考えられている。

キャンプ外での活動の機会の拡大と、各支援組織への難民自身によるアプローチが重要視されていることがわかる。

CBO の果たす役割

CBO は、キャンプで暮らす人々及びコミュニティと、MOI や NGO などの間に位置し、彼らを繋ぐ存在として組織されてきた。従って、CBO はキャンプ内のネットワーク構築、協力体制の調整などの役割を果たしている。その他具体的な活動としては、女性の虐待問題への対処や、様々な職業訓練、雨季の支援とか、薬物からのエスケープ、障害者への支援等が挙げられる。

CBO はカレンの人々の生活のため、地域社会のため、未来のために、非常に活発に活動しているので、NGO、Thailand Burma Border Consortium (TBBC)、そしてカレンの人々から強い支持を受けている。MOI もまた CBO の活動を認めている。

CBO は難民の人々を代表する存在として重要な役割を果たしていると考えられる。

CBO で働く人々にとってはその活動は全くのボランティアであるが、活動を通じて、自らのコミュニティを有しているということが意識されるという。

今後の活動としては、特に若者の職業訓練への需要が高いため職業的な教育の支援を強化していきたいと考えており、可能であれば NGO の支援を受けてインターンスクールサポートを行いたいという意向である。

CBO と NGO の協力の中で、職業的な教育機会の充実化が求められている。

学校外教育への取組みについて

これまでの教育分野における活動は、識字教育、聖書の教育、歌の教育、子どもへ教え方についての訓練などが行われ、成果を上げている。しかし難民キャンプでは高校教育まで終えた人々がそこから、専門分野を学ぶ機会が欠けている。教育は年齢を問わず非常に多くの人に求められており、今後は特に、大人・高齢者への教育（adult education）や、

障害者への教育（SE: Special Education）を推進することを目指しているという。また、コンピューターを用いた教育も非常に望ましいので、NGO による支援が得られればぜひ学校で行っていききたいという意向である。

難民の人々に対するエンパワーメントは、いかに教育するかということだろう。

様々な面での教育機会が大きな課題であり、特に高校教育以降の専門教育、大人への教育、障害者への教育、コンピューター技能研修など、学校外教育への需要が非常に高いことがわかった。

2. 難民キャンプ内でカレンの女性への支援を行う KWO へのインタビュー

<インタビューを通して知りたいこと>

CBO（KWO）の立場から見たキャンプの現状、問題点

CBO（KWO）の活動について

難民の人々へのエンパワーメントという観点から

<インタビュー結果の概要及び備考>

CBO（KWO）の立場から見たキャンプの現状、問題点

KWO が活動を始めてから、キャンプ内で女性のおかれる状況は随分と良くなっており、現在、大きな問題というのは特にはない。ただ、収入がない女性にとってはしばしば必要なものを買えないことが問題となる。KWO SHOP で女性たちが作った商品を買ってはいても、十分な収入源とはなりえない。こうした問題は、教育環境に由来している。よりレベルの高い教育の機会があれば、それが仕事へのつながり、収入のない家庭の問題はより改善されるだろう。

今後、**women rights, equal rights, cultural development rights** を守ること、確立していくことが求められ、また、カレンの言語、カレンの文化を守ることが非常に重要だと考えられる。女性が収入を得て、自分自身で生計を立てられるようになるのが望ましい。

女性への教育が、女性の収入獲得 男性と同等の立場 女性の抱える様々な問題の解決、へとつながる基礎になるのだと考えられる。

第三国定住に対しては、強い関心を寄せている人もいれば、そうでない人もおり、人によりけりである。実際キャンプでは十分に人権が保障されておらず、教育は 10 年までしか受けられない。その先の教育を受け、仕事につながるような知識、技術を身につけるために第三国定住はよいことであるが、どこの国へ行こうともカレンの人々、伝統、国を忘れることはできないだろう。第三国定住は、「カレン」を失うリスクを伴っているのである。

第三国定住により教育の機会を得ることができるが、それは一概に望ましいことだとは言えず、多くの人々にとってカレン民族であり、カレンの国を失わずに生活していくことは非常に重要な意味を持っているのだと感じられた。

CBO (KWO) の活動について

KWO は、女性の平等を目指して 1970 年代にカレン州に設立された。戦争の激化により移住を余儀なくされたが、キャンプに移ってからも KWO の活動を止めることはできず、改めて組織されたのがこの KWO である。現在、実際に 孤児の保護と養育、 保育園の支援、 Special Education (障害者への支援)、 夫を亡くした女性への支援、 高齢者への支援、 baby knit (乳幼児への支援、子育て支援)、 adult literacy (大人の識字教育)、 sports activity (スポーツ活動)、 income generation (職業訓練) という 9 つの分野で活動を行い、重要な役割を果たしている。その他、特に女性の権利侵害 Sexual Gender Based Violence (SGBV) へ対応し、被害を受けた女性の保護を行っている。ただし、全ての 15 歳以上の全ての女性を組織することを目的としているが、実際はその 1 / 3 ほどである。基本的にはキャンプ内で活動しているが、半年に一度はカレン州内の国境沿いの村を訪れ、物資のデリバリーサービスなどを通して彼らの力になっている。国境を越えての活動も、MOI に事前に通達をすれば問題はないという。また定期的にレポートを作成し、NGO や TBBC に報告することにより、そうした団体とよい関係を築いている。

KWO の活動はキャンプへの移住以前から行われてきたもので、女性の平等な権利の獲得、女性の保護の必要性に応じ、彼ら自身の中から必然的に立ち上げられている活動なのだわかった。そのため、キャンプの外でも、求められるところで活動しているのだ。MOI がそうした活動を認めている点は大きな意味をもつのではないかと考えられる。

難民の人々へのエンパワーメントという観点から

〔Mae La〕KWO の活動を始めたのは、生まれながらに持つ平等な権利(equal rights)を守るために、カレンの女性のリーダーになることを選んだからであり、今では KWO の活動が、自分の生活の中心にある。また、組織を統制するために常に指導者らしくあるよう心がけているという。「エンパワーメント」に関しては、リーダーシップトレーニング、エンパワーメントトレーニングを強力に行っていくことが重要であると考えており、KWO ではファシリテーターを訓練する機会を定期的に設けている。

〔Umphiem〕私は全ての女性が男性と同等の立場に立ち、自立して生きようになることを願い、KWO の活動に携わっている。人々のエンパワーメントは、女性の権利について女性自身が知ることが、人々のエンパワーメントには不可欠だと考える。今後、難民の人々がより自立して生きるため、より権利を得るために、NGO などを通じてキャンプの外の情報をえることや、タイ政府へアプローチすることなどをしていきたい。

KWO のリーダーは、女性の平等な権利獲得に強い問題意識と使命感をもって活動しており、人々への「エンパワーメント」に対する意識も高いと感じられた。また、今後のより自立した生活のために、非常に積極的な希望をもっていることが感じられた。

3. 難民キャンプ内で青少年への支援を行うKYOへのインタビュー

<インタビューを通して知りたいこと>

CBO (KYO) の立場から見たキャンプの現状、問題点

CBO (KYO) の活動について

難民の人々へのエンパワーメントという観点から

<インタビュー結果の概要>

CBO (KYO) の立場から見たキャンプの現状、問題点

キャンプの現状としては、教育の機会及び職業に就く機会が限られている点が一番の問題である。特に若い人々にとっては、仕事につながるような高いレベルの教育を受ける機会がないため、学校教育を終えるとただキャンプにいただけになってしまうことが大きな障害となっている。

若い人々から見て、実践的な教育の機会と働く機会の欠如は非常に切実で大きな問題だとわかる。

このような教育を求めて第三国に定住することを望む人々も多いが、一方で第三国へ行くことはカレンの土地から、カレンの人々から離れることを意味するため、それを望まない人もいる。どこで生活するにしても、カレンのことを忘れることはできないという。

(第三国における) 更なる教育機会の獲得と、カレンの国、人々と共に生きていくことが矛盾する (両立しない) 関係であり、それが人々を苦しめているのではないかと感

じられた。

CBO (KYO) の活動について

KYO はキャンプで暮らすカレンの人々の教育、文化、環境のために若者を組織し、将来のリーダーの育成を目指して作られた。実際、多くの若者が活動に参加し、リーダーシップ研修をはじめ様々なトレーニングを受け、政治的な思考を養い、自分たちの文化や歴史、国について議論する場として KYO は機能しており、将来を担う若い人々の自立性を鍛える役割を果たしている。

将来を担う若者の育成が、様々なトレーニングや政治や自国の問題に関する知識の獲得、議論を通じて行われていることに大きな意義を感じる。

KYO の活動はしばしば必要な物資や技術の不足、教育の機会そのものの不足などにより困難に直面することがあり、また、有給の仕事ではないため、フルタイムで働けるメンバーが少ないことも障害と言える。しかしながら NGO やキャンプリーダーとはよい関係を築いている。今後は NGO の支援をえてコンピューター設備の導入や、ダンスや絵など多様なトレーニングコースの実現が期待されるところである。

キャンプの外にある KYO 本部ともよく連絡をとり合い、タイの学校や学生と交流をもつなどして活動を広げている。

難民の人々へのエンパワーメントという観点から

〔Mae La〕 将来、よりよい生活を送るため自分ができることを考え、KYO の活動に加わり、よい指導者になろうと考えた。KYO 内の会議が人々のエンパワーメントの機会になっているのではないだろうか。カレンの文化はキャンプ内でも、カレン州でも維持されており、今後も守られていくだろう。今後は、薬物の取り締まり、薬物濫用の防止に力を入れていくとともに、カレンという土地、人々、国が失われないことを望む。

〔Umphiem〕 若い人々が協力し、組織化していくことの必要性を感じたため、KYO の活動に参加し、様々な経験、様々な知識を得ようとしている。実際、活動を通じてどのように人々を組織し、説得し、訓練するのかを学んでおり、人前で発言する力も身につけている。カレンの文化はこれからも維持されていくだろう。文化を失っては、カレンそのものを失ってしまう。とにかく今後、重要なのは、キャンプにおける様々な機会の不足を改善することである。

実際に KYO の活動に携わる人々が、この活動を通じてキャンプ内の問題（教育や職業の機会や、カレンの文化に関することなど）に自分自身で向き合い、様々な経験をすることで、成長を感じているのではないだろうか。それこそが、KYO の活動の実績であるように思われる。

4. インタビューに基づく考察

a. 難民自身による自主的なキャンプ運営に関して

インタビューする前までは、難民の人々は、「自主的」とはいつてもあくまでキャンプの運営に「参加する」という形で関わっているのだと考えていた。しかし、実際は難民の人々から構成されるキャンプ委員会が運営主体としてキャンプをまとめており、MOIはその監督機関として、NGOはキャンプ委員会と協力してキャンプを支援する組織として、位置づけられていることがわかった。当初私がキャンプ生活に抱いていた受動的なイメージとは異なり、難民の人々の非常に能動的な活動が見られる。

参考までに、UNHCRの「難民の参加」に関する見解を参照すると、

難民の参加は、彼ら自身の生活や彼らのコミュニティの生活を管理する責任を彼らに認識させることを可能にする。外からの援助に依存するようになるのではなく、難民の参加は難民支援計画における必要不可欠な部分であり、男女を問わず、支援の計画の段階から、最終的な評価の段階まで関わってもらうことが肝要。

とある。今回インタビューを行った Mae La、Umphiem 両キャンプでは、既に難民が自らの生活や彼らのコミュニティの生活を管理する責任と意義を認識している段階にあるのではないかと考えられる。

b. 難民の人々の捉えるキャンプの現状、問題点

上記のような難民自身による能動的なキャンプ運営が見られる中で、現状として一体どんな問題があるのだろうか。自治的な側面がある一方、いわゆる普通の村や町とは、どのような点で異なるというのか。

キャンプ委員会、KWO、KYO、それぞれの考える現状における問題点は、おそらく「キャンプにおける、幅広い意味での教育の機会の不足」という点に集約できるだろう。キャンプ内の教育の機会は現在、随分整ってきたのは事実である。実際、ZOA Refugee Care (ZOA)の発行する“EDUCATION SURVEY 2005”によると、現在キャンプでは初等教育、中等教育、高等教育、職業訓練、夜間学校、識字教育、言語教育といった様々な教育の機会が提供されており、また、2003 4年(2003年度)における就学率は Don Yang キャンプを除く全キャンプで、学校に通う年頃の子もたちの99 100%であるという。

しかし、決してそれで十分ではないのである。高校教育を終えた人々にとっては、その先より専門的な知識・技術を学ぶ機会がなく、学校教育修了後はキャンプにただ留まるだけで、学んだことを生かす機会も乏しい。また女性にとっても、収入を得ることにつながるような教育の機会があれば、平等な権利の獲得、男性と同等の立場の獲得の実現に近づくのだが、現状は女性の収入がないことが家庭内暴力の一因にさえなっているとのことである。つまり、必要とされているのは仕事や職業に直接いかせるような実践的な教育を受ける機会と、それを実践する場である。

こうした教育機会の需要は、第三国に定住することにより満たされうる。そのため、特に若い人々の中には第三国定住を強く望んでいる人も多いようである。だが、キャンプ内の全ての人間が第三国定住することは不可能なのが現実であり、また、もし仮にできたとしても、それではカレンの人々は散り散りとなり、カレンの地域社会は失われてしまうだろう。そのため、第三国定住は必ずしも望ましい解決策ではありえないのである。このことから、難民の人々は、(第三国における)更なる教育機会の獲得と、カレンの国や人々と共に生きていくこととの間の葛藤を生じるのではないだろうか。

c. CBO の果たす役割

CBO はその名の通り、地域社会に根ざした活動を行う組織である。初めはそれを具体的にイメージできなかったのだが、インタビューを通じて、難民の人々と NGO や MOI などの監督機関、支援機関の間に位置する存在として、下のようにイメージされた。

〔難民の人々〕 〔CBO〕 〔NGO、MOI 等の監督機関、支援機関〕

すなわち、難民の人々のニーズを吸い上げ、NGO による支援に反映させるための存在として、また、NGO による支援の受け皿となり、より適した、より効果的なかたちで難民の人々に利用されるよう調整する存在として、役目を果たしているのではないだろうか。CBO は難民の人々に一番近い存在であるからこそ、彼らのことをよく知り、彼らの求めることをすることができると考えられる。難民の人々は、CBO を通じて様々な活動に積極的に関わっていけるのであり、それは非常に意義深いことである。

d. 難民の人々のエンパワーメントに関して

「エンパワーメント」は近年日本でもしばしば耳にするようになった言葉である。しかし、それが実際何を意味しているのものであり、どのように推進されていくものなのかというのは、非常に捉えにくいものだと感じている。そのため私は、難民の人々がどのように考えているのかということを通じて、「エンパワーメント」の意味するところについてもっと知ろうと試みたのである。

インタビューによると、キャンプ内の指導者の何人かは「エンパワーメント」に関して明確なビジョンをもっていることがわかる。それが難民の人々にとっていかに重要であり、いかにそれを達成していくかということについてである。そして私は、難民の人々が彼らの能力や責任を認識するのに CBO の活動が極めて重要であると考ええる。実際に CBO の活動に携わる人々が、この活動を通じてキャンプ内の問題(教育や職業の機会や、カレンの文化に関することなど)に自分自身で向き合い、様々な経験をすることで、成長を感じているのではないだろうか。それこそが、CBO の活動の実績であるように思われる。確かにキャンプ内にはまだまだ多くの制約や限界があるけれども、難民自身による取組みは彼らが将来少しでもより自立した生活を営むことを可能にするのではないだろうか。インタビューを通じて知ることができた彼らの様子や活動を、非常に力強く感じた。

その他

- ・ リコーダーを通じた子どもたちとの交流

当初考えていたように、キャンプ内の図書館で定期的にリコーダー教室のようなものを開くことはできなかったが、数週間のうちに何回かキャンプを訪れ、いくつかの図書館を訪問するたびにリコーダーを演奏し、子どもたちにも挑戦してもらおうというかたちで交流を試みた。カレン語でリコーダーの吹き方を教えることはできず、またリコーダーを扱うにはまだ少し幼い子供も多かったことから、なかなかうまく教えることはできなかったが、子どもたちの様子を見る限りそれなりに楽しんでくれたのではないかと思う。短い時間ながらも心を開いて、笑顔を向けてくれた子どもたちに心から感謝したい。

- ・ メーサリアン事務所訪問

4週間の研修の最終週、メーサリアン事務所のほうへ行く機会をいただいた。以前メーサリアンのスタッフの方に仕事をする上で一番の困難は何かを訪ねたところ、道の問題だ、という答えが返ってきて、私にはどういうことか想像ができなかったのだが、実際に訪れてみて、その大変さが身にしみてわかった。メーサリアン事務所が担当するメラウ、メラマルアン両キャンプは国境沿い近くの山岳部にあり、そこへのアクセスは特に雨季になると非常に悪い。道とはいえないような泥の中を車でなんとか進んでいくのである。ここでは、キャンプ内の全部の図書館に必要な物資を届けたり、モニタリングを行ったりすることが、それだけでかなりの重労働であり、多くの時間を要することがわかった。私が滞在していた5日間程度の間にも、車が動かなくなり、ワイヤーを使用したり、NGO 同士が助け合ったりということが何度も見られた。

また、この二つのキャンプは特に国境にほど近いため、キャンプの安全性や、新しくキャンプに来る人々など、特有の問題を有しているのだと教わった。もちろん、他のキャンプと同様に、教育や職業機会の問題などもある。このように、様々なキャンプの様子を目の当たりにし、非常にいい経験をする事ができたと思う。

最後に

この研修プログラムは、私にとって本当に様々な意味で有意義なものでした。興味をもっていた難民のことについて、日本では知ることができないようなことをいろいろ学べたというのはもちろんですが、それに加えて、海外のゲストハウスで1人生活したことで、SVAのスタッフさんだけでなく、各国の人々 商店を営むタイの人々、様々な領域で働く欧米のNGO職員の方々、薬学を学ぶアジアやヨーロッパの学生たちなど と

コミュニケーションをとる機会に恵まれ、日本や日本人が世界の中でどのように見られているのかを感じたこともまた忘れ難い経験です。想像していた以上にいろいろなことを考えさせられました。これからも、こうした研修プログラムをぜひ続けていってほしいと思います。今は、この研修中に会った全ての人に感謝の気持ちを伝えたいです。ありがとうございました。

<インタビューの詳細 in Mae La Camp >

キャンプ委員会 (Camp committee) in Mae La Camp へのインタビュー

1. 何故、難民自身による自主的な運営がなされるようになったのですか。(その背景は。)

多岐に渡る問題の解決のために、よりよいマネジメントが求められたからである。

2. キャンプ委員会がキャンプ運営に関わるようになる前と現在とでは、どのような点が異なりますか。

多くのことが変わった。キャンプ委員会の働きにより、NGOs や CBOs など組織間のコンタクトが容易になり、コミュニケーションがよりよく図られるようになった。意思決定のミーティングにも難民のコミュニティから参加するようになった。

3. 難民の自主的運営が行われるようになる過程で、何か障害はなかったのでしょうか。

あったとすれば、それはどういったことで、どのように克服したのですか。

教育委員会に関しては、問題はない。

キャンプコミュニティから代表を選ぶのが、キャンプ委員会にとっては問題である。

4. キャンプ委員会とタイの行政府 (MOI に代表される) との関係はどのようなものであるか。

何か問題があったときにMOIを通して解決する。

たとえばコミュニティ同士やNGO同士で問題があった場合にMOIが間に入る。

他に、NGOがCCやその他の組織にインタビューをするときにMOIの許可を得る必要があるように、MOIはキャンプの組織を監督する働きをしている。

5. 長期化する難民キャンプにおける問題点や課題をどのように捉えていますか。

(難民の帰還、第三国定住、就学を終えた人々のその後、などについて)

MOIやNGOそして難民が互いに理解し合えば、長期化している難民キャンプでも、キャンプ生活がずっと続こうとも、問題はない。

学校教育を終えた人々は、本国への帰還にしても、第三国定住にしても、うまく適応できるだろう。それだけの教育を受けているはずだからだ。

6. 難民の人々がおかれた状況をどう考えますか。特にどのような点で自由を制限されており、どのような点で困難に直面するのでしょうか。

人権がない状況である。キャンプにとどまらなければならず、外に出ることはできず、MOIの制限を常に受けている状態だ。そして食料が供給されているとはいっても、それは量的にも種類のにも限られたものであって、十分ではない。

キャンプで供給される食料は、米、豆、調理用の油、炭、チリ、魚のペースト、塩、ブレンディッドフードなど

他にも、たとえば壊れた屋根の修理をするためにキャンプの外に出た難民が、タイの軍隊に見つかって殴られるということがあった。

7. 今後、NGOにどのような支援を求めますか。現在行われている支援に加えて、何か特に期待することはありますか。

必要なものは既に求めてきたし、既に供給されている。たとえば、建物、資材、文具など。あえて言うのなら、コンピューター支給の支援はできないだろうか。

8. キャンプの運営が難民自身によって自主的に行われることの意義をどのように考えますか。(CBOsの果たす役割とは。)

キャンプ内のネットワーク構築や、協力体制の調整などの役割を果たしている。多くのCBOが活動をしており、それにより、様々なものの供給がより容易に行われるようになっているおり、CBOの活動から、多くの利益を受けている。

9. 何故CBOはNGOsやTBBC、カレンの人々の支持を得て、キャンプで活動しているのでしょうか。

彼らのコミュニティ、彼らの生活、彼らの未来のために、とても活発に活動しているから。それを認められている。

多くの役割を果たしている、たとえば、問題の解決、女性の虐待への対処や、様々なトレーニング(職業的な...編み物とか。) 雨季の支援とか、薬物からのエスケープ。

障害者への支援(KHWP)

10. CBOで活動する人々自身にとって、そういった活動は自分自身にどんな影響力をもつと思いますか。活動を通じて、自分自身感じる変化や、「気づき」などはあるのでしょうか。

(様々なトレーニングにアクティブに参加するようになった。)

CBOの活動をする人自身にとっては、その活動はボランティアで、何か経済的な利益を受けるわけではない。ただ、自分たちのコミュニティを持っているという意識がある。

CCは2年おきに再校正される。

11. 今後、CBOに求められることとは何だと思いますか。

KYOに関していえば、ワークショップをやる。ZOAの支援を受けて。

特に職業訓練に多くの人々が興味をもっているので(特に若者たち 学校教育を終えた人々は) 人に教えるためのスキルだとかいったような、職業的な教育を強化していきたい。

他に、インターンスクールサポートを考えているが、これはNGOの支援が得られるかどうかにかかっている。もしできたとしたら、それはとてもいいことに違いない。

12. 難民の人々が将来的に自立した生活を送るためには、どのようなことが課題となると思いますか。

確かに、もっと自立的になることは難民にとって重要である。人権という観点から考えても。そのためには、キャンプの外で活動できるような機会がもっと必要である。

13. 「自給自足」についてどのように考えますか。難民の人々にとって自給自足は望ましいと思いますか。またそれは、どの程度達せられるべきで、どの程度可能なのでしょうか。それをどのように促進するのでしょうか。

支援を待つだけでなく、自分たちから活動していつている。与えられるのを待っているだけの状況から、今は確実によくなっている。教育とかも以前は整っていなかったのに、今はかなり。これからは更に、NGOなど各組織に、難民自身の意見とか要望とかを聞いたり、受け入れたりしてもらおうことが、より「自給自足」には大切だろう。

14. 教育分野について、どのような取組みがなされていますか。

(たとえば、図書館活動、職業訓練などの *informal education* は何故必要なのか。

NGOの支援では欠けているものがあるからか。

学校教育だけでは十分でないものがあるからか。)

CBOはNGOが入ってくるずっと以前から存在し、キャンプで活動してきた。(だから、NGOとか学校教育がどうとかには関係ない。難民のコミュニティとMOIやNGOを繋ぐための存在、間にある存在として、CBOは必要だったから作られたのである。(いわば必然的なものである。))

15. 難民キャンプではどのような教育を受ける機会が欠けているのか。どのような教育が特に必要とされているのでしょうか？

High schoolを終えた人々は、そこから先(専門知識及び専門的な技術を身につけるために自分の専攻として学ぶもの)を学ぶ機会がない。特別なことを学ぶ機会がない。難民キャンプの状況を考えると、そのような専門的なこと、特別なことを教えるための *material* がないからだ。

何を学びたいか選ぶから、それによって異なる。自分の学びたいプログラムを選べる。それぞれのニーズを満たすべく。とても重要な、多くのことを学ぶ。

国際労働や、海外で働くためのトレーニングなど。

16. これまで行われた教育分野の活動は、実際にどのような成果を上げているのでしょうか。

とても多くの影響が与えられる。KBBS Cは言語を教え、他には、聖書、地質学、子どもに教えるやり方だとか、歌、これを学ぶことができるように。

17. 教育分野の支援を通じて、CBOが目指すものとは。こういったことを目標としていますか。

高齢者教育や大人への教育 (= adult education) である。アダルトスクールは難民の人々によって組織された。教育をもっともっと多くの人が必要としている。

スペシャルエデュケーション (SE) として、目の見えない人のような、障害者への教育が求められる。彼ら自身がコミュニティの中でアクティブでコーポレーティブであるように。そしてCCは彼らを軽視したり、見下したりできない。彼らを encourage していかなければならない。

18. 「エンパワーメント」とはどういうことを意味すると考えますか。

難民の人々へのエンパワーはどのようにして達成されるのでしょうか。

いかに難民を encourage し、いかに教育するかということだろう。

未来に向けて多くの人がこの問題に直面するから…。(確かな答えなんてないのではないか)

終わりに

もし可能ならば、コンピュータースキルをトレーニングすることが必要。学校でのIT教育に十分な量のコンピューターの設置を望む。

カレン女性機構 (Karen Women Organization) In Mae La Camp へのインタビュー

1. 何故 KWO は組織されたのですか。(その背景は。)

KWO の活動は、1996 年に Mae La Camp で始まった。その背景には、識字教育、高齢者への支援、織物トレーニング、夫を亡くした女性への支援、セーフハウス、AIDS 教育、職業訓練など、多くの需要が生じていたということがある。

2. 難民キャンプにおいて KWO はどのような役割を果たしていますか。

1 のような支援を提供する、非常に重要な役割を果たしている。

3. 難民の人々がおかれた状況をどう考えますか。(難民キャンプで特に女性が直面する困難や問題はあるのか。あるとすればそれは何か。)

現在は特に問題ない。(KWO が活動を始めて、キャンプの中で女性がおかれる環境は随分良くなった。) KWO の活動にも支障はない。

ただ、しばしば収入のないことが女性を落胆させることがある。お金がないために食料や衣類を買うことができないからである。

4. どのようなことが難民キャンプの女性に必要とされていると考えますか。

3 と関連して、ときどき普段供給される(豆や米のみ)以外の食物(パンとか)が欲しいと思っても、お金がないために買えないことが問題である。新しい衣服を買うときも同様。

それゆえ、収入を得る能力を女性が身につけることが求められる。

また、病院にいかなければならない場合でも、キャンプではそれがかなわない場合がしばしばあることも問題である。

5. *KWO* のメンバーは、活動中どのような問題に直面するのでしょうか。

現在、特に問題はない。

6. 何故 *KWO* はキャンプ内だけでなく国境を越えてカレン州内でも活動しているのですか。

基本的には、タイ国内の難民キャンプ内で活動している。定期的にミャンマーの (Karen States 内の) 国境沿いの村を訪れ、物資の支援を行う。(衣類、ポット、plastic sheets、バケツ、お皿や石鹸などデリバリーサービスをしている。クリスマスプレゼントを持っていくことも。それにより、村の人々にハッピーをもたらしている。国内避難民に対する支援としては他に、教育支援やカウンセリングなどを行っている。

国境を越えての支援は危険ではないのでしょうか？

危険はない。なぜなら、国境を越えて活動する際は、*KWO* のリーダーに知らせておき、それをリーダーが *MOI* に通達するからだ。そうすれば、*MOI* は *KWO* の活動を妨げることはない。

7. 第三国定住を推進することについてはどう思われますか。

第三国定住に非常に関心を持っている人もいれば、そうではない人もいる。人によりけりである。第三国定住したら、物質的には恵まれ、不自由ない生活を送れるだろう。だが、両親と離れなければならぬ可能性がある。そうなれば、新しい家族を気づかなければならぬ。

8. あなた自身は何故 *KWO* の活動に参加し始めたのですか。

生まれながらに持つ平等な権利 (equal rights) を守るために、カレンの女性のリーダーになることを選んだ。

9. *KWO* の活動は、実際にどのような成果をあげていますか。

女性の権利侵害、SGBV Sexual Gender Based Violence への対応。(キャンプではしばしばDVが発生する。)被害を受けた女性を保護し、幸せな家庭へと帰ってもらおうということをしている。

また、毎年各種トレーニングを行っている。たとえば編み物、織物や、テーブルクロス作りなど。

10. キャンプ内の女性は今後の生活にどのようなことを望んでいるのでしょうか。

Women rights, equal rights, cultural development rights を守ること、確立することである。また、カレンの言語を守り、カレンの文化を守ることが非常に重要だろう。

11. 妊娠している女性に対してはどのような支援を行っていますか。

国境沿いにいる妊婦さんに対し、病院で検査の検査や、シャンプーや石鹸、衣類などの支援を行っている。もし親類のいない妊婦さんがいたら safe house に保護し、親類を探すようにしおり、親類が見つかったらそこに送るようにしている。

Traditional birth attendant program

これは、基本的な保健衛生へのアクセスが難しいカレン州内の国内避難民を対象としたものである。国内避難民の生活区域では、保健クリニックが非常に少ない。そのため、女性にとって、出産は非常に大きな命の危険を伴う。

12. 「エンパワーメント」の意味をどう捉えていますか。また、難民の人々へのエンパワーはどのように達成されると思いますか。

リーダーシップトレーニング、エンパワーメントトレーニングを強力に行っていくことである。実際、SCBVトレーニング、法についてのトレーニングを毎月実施している。

13. NGOにはどのような支援を望みますか。現在の支援の他に何か期待することはありますか。

ZOAが良く支援してくれている。TBBCも保育園の設立などの支援をしてくれた。十分ではないが、常に改善されている。次世代のことを考えた支援を期待する。

14. あなたにとって、KWOで働くことはどんな意味をもっていますか。

全てがKWOである。自分の生活の中心にKWOがある。たとえばKWOに客人が訪ねてきたら、どのようにおもてなしするかを考える。また、組織をコントロールするためにいつもよい指導者らしくあるように心がけている。

15. KWOのメンバーは女性をトレーニングするための能力、技能をいかにして身に身につけているのですか。

ファシリテーターを訓練する機会を定期的に設けているので、みんなそこで教える技術を学んでいる。Training of Trainers (TOT)システムである。

KWO In Umphiem Camp へのインタビュー

インタビュー相手：Moorahpw さん（30歳）

CBOの立場から見たキャンプの現状、問題点

1. 難民の人々がおかれた状況をどう考えますか。（難民キャンプで特に女性が直面する困難や問題はあるのか。あるとすればそれは何か。）

教育の環境が問題である。お金を得るための仕事を持ち、収入を得て家庭を守らなければならないのにそれができない。より高い教育の機会があればもっと状況は違っただろう。教育の機会がない。そのため、働けない。家庭に収入がないと、様々な問題を解決できない。特に、夫を失った女性はたくさん

子どもを抱えていながらも収入がないことが多く、特に問題である。子どもを育て、栄養を与えてやる
ことができない。

2. どのようなことが難民キャンプの女性に必要とされていると考えますか。

NGO が様々なものを提供してくれている。

食料（豆とか）は TBBC が。

Health AMI、ARC

Vocational ZOA

Education ICS、ZOA、CT、CORE

ファミリープライニー PPAT

Income generation でキャンプの外に職を見つけることができるように。

職業訓練は受けることができる。けれど、物資やお金は十分じゃない。

KWO SHOP を開いていて（月～金）NGO などキャンプにはけっこう人が集まるから、もっと売れば
収入になるのだが、実際、収入源といえるほどは売れない。Camp pass が必要だから、外からそん
なに人が入れないからだ。

3. 第三国定住を推進することについてはどう思われますか。

かれこれ難民キャンプで生活していてももう 20 年以上になる。タイでは難民は **displaced people** とし
て扱われ、人権がほとんどない。教育は 10grade までしか受けられない。もし第三国定住できれば、
その先も教育を続けられ、職へと繋がるような教育を受けることができる。しかし、どこか他の国へ行
ったとしてもカレンの人々、カレンの伝統、私たちの **country** を忘れることはできない。だから私個人
は、第三国定住には興味がない。

4. キャンプ内の女性は今後の生活にどのようなことを望んでいるのでしょうか。

収入があれば、家族の問題は解決する。男性はアルコールへの依存をやめ、家庭内暴力は収まるであ
ろう。アルコールは男性をダメにしてしまうので、家庭がだめになってしまう。もし、女性に収入があ
れば女性が自分自身で生計を立てることができるようになる。それを望む。

CBO（KWO）の活動について

5. 何故 KWO は組織されたのですか。（その背景は。）

1985 年に設立された。その目的は

孤児の保護、養育 94 人の子どもたちを保護している。（多くは、両親が亡くなった子ども、国内
避難民、夫をなくした女性の子供である）

保育園の支援

Special Education 障害者への支援

夫を亡くした女性への支援 病気の場合には病院へつれていく、栄養のあるものを与える、もし住

む場所がなければ、新しい家を建てる。

高齢者への支援

baby knit 新しく生まれた赤ちゃんに対して、赤ちゃん用の粉や石鹸、シャンプー、衣類などを支援し、また、子育てに関するリーフレット（KWOが作成したもの）を配布している。

adult literacy 381名の大人たちが、このコースを受けている。60歳までを対象としているため、幅広い年齢の人々が集まる。ビルマでは学校に通えなかったため、キャンプ内で初めて教育を受ける機会を得た人も多いのだ。

sports activity サッカー、バレーボールなど

income generation 女性が収入を得るための活動をしている。織物など。これには大きい器械を使うものと、**hand weaving** の2種類がある。

6. 難民キャンプにおいてKWOはどのような役割を果たしていますか。

- ・ Through support to women, what do KWO aim for? What's the object?

7. KWOのメンバーは、活動中どのような問題に直面するのでしょうか。

15歳になったら全てのカレンの女性はKWOメンバーになることになっている。しかし実際はキャンプ内の6000人の女性のうち、メンバーになっているのは2000人である。活動に参加できていない女性がいるのが問題である。その理由の一つには、KWOの活動に興味を持っていない、また高年齢すぎるなどがあり、他にムスリムの女性はムスリムの**special women group**を組織していることが挙げられる。

8. KWOの活動は、実際にどのような成果をあげていますか。

(literacy and non-formal education/ Human rights and democracy education, women's empowerment programs...)

9. 非正規教育が人々に与える影響についてはどのように考えますか。

non-formal education は大人へ識字教育の一環として行われている。というのは大人への識字教育は言語教育のパートと、非正規教育のパートに分かれているのである。

特にこの9月には**non-formal education**に関連するコンペティションが開催される予定であり、女性の権利や数学、KWOの目的について、ビジネスマネジメントについてなど、話される予定である。
KWOメンバーそうした知識や技術をどのようにして得ているのか。

メーソットにあるKWO事務所に訓練を受けに行く。KWOにはセクションごとに2人のリーダーがおり、彼女たちが代表して訓練を受けてくるのである。キャンプコマンドーの許可さえとれば、キャンプの外へ行くことができる。また、キャンプで作ったカレン商品をメーソットの事務所においてもらうこともある。

10. 妊娠している女性に対してはどのような支援を行っていますか。

Baby knit がユニセフから援助され、またCT (Consortium Thailand) も。

11. 今後、NGO にどのような支援を求めますか。現在行われている支援に加えて、何か特に期待することはありますか。

もっと教育を。そして大きな部屋を。

12. 何故 KWO はキャンプ内だけでなく国境を越えてカレン州内でも活動しているのですか。

もともとカレン州に住んでおり、1970 年代に既に KWO は設立されていた。しかし 85 年に戦争が激化し、多くの人々が殺された。そして移住を始める。キャンプに移ってから KWO の活動を止めることはできず、改めて組織したのがこの KWO である、だから、もしどこか他の国に定住したとしても、DV の阻止や女性の平等な権利を求めて KWO を組織するだろう。 S P P C ?

ビルマでは今も、戦いの中で女性が侵害されている。私たちは、(状況にもよるが、) 1 年に一度、互いの状況を把握し、情報を共有するためのミーティングを行っている。

難民の人々のエンパワーメントという観点から

13. あなた自身は何故 KWO の活動に参加し始めたのですか。

まず KWO メンバーとなり、二年に一度の選挙のために推薦され、KWO のリーダーとなった。KW O メンバーの中から代表して 200 人が集まり、秘密選挙が行われる。

14. あなたにとって、KWO で働くことはどんな意味をもっていますか。

私は全ての女性が男性と同等の立場に立ち、等しく、自分自身で自立して生きていけるようになることを望んでいる。しばしば女性は弱々しく見られ、軽んじられてしまう。私は、女性が男性と同じように働けるようになることを実現したい。

15. 「エンパワーメント」の意味をどう捉えていますか。また、難民の人々へのエンパワーはどのように達成されると思いますか。

人々のエンパワーメントは女性にかかっていると考えます。もし女性が女性の権利について知っていたらエンパワーメントは実現するだろう。女性の権利を女性自身が知らない限り、エンパワーメントは実現しない。

16. 家庭内暴力に対してはどのような対処をしていますか。

問題を解決する役目を KWO は果たしている。DV が起こったら女性は KWO に助けを求める。そして家族を KWO に呼び、何が起きたのか事実を確認する。調停、合意を取り付ける。もしその合意に男性が納得しないようだったら、KWO は MOI やキャンプコマンダーに連絡し、解決してもらう。DV はよく、というよりは時々起こるのだが、それは収入のない家庭であることが多い。

17. MOI やキャンプ委員会と、KWO はどういった関係にあるのでしょうか。

何かのセレモニーやお祝いがあるときに MOI や CC にスピーチをお願いしている。たとえば国王や女王の誕生日のときなど。また、何か問題があったときには、連絡し、共に話し合うようにしている。

18. KWO は NGO や TBBC、そしてカレンの人々から強い支持をえて活動していると聞いています。

そうした協力的な体制はどのように構築されたのでしょうか。

定期的にレポートを作成し、NGO や TBBC などには報告をしている。

これにより、信頼される、よい関係を築いている。

19. 将来、難民の人々がより自立した生活を送るためには何が重要であると考えますか。

キャンプの中にも、出入りする NGO を通じて情報は得られるし、アプローチもできる。だから、キャンプの中でもより権利を得られるように。タイ政府にアプローチしていきたい。

20. 自給自足については、どのように考えますか。

キャンプ内に 20 年以上住んで、でも故郷へ帰る目処は立たない。教育はより多くのものが供給され、職業訓練のさまざまな機会が得られるようになってはきた。しかし、全て訓練で終わってしまっていて、それを活かす場がない。実践できない。だから、もっと practical な場を望む。

21. どのような将来のあり方が、最も望ましいと考えますか。

第三国定住は、より高い教育が受けられるし、よいことだと思う。

キャンプにいても、もしタイへ教育を受けに行くことが可能であり、それが収入を得る機会に繋がるのであれば、私にとってはそれが一番望ましい。キャンプ内で、でももっと自立した生活を送れるようになり、そしていつの日か平和が戻ったら国へ帰る。そうであったほしい。第三国定住できたとしても、キャンプの全ての人が行くことはできない。行けたとしても散り散りである。それにたとえ人は移住できても、国は動かせない。私たちの国は動かせない。国から人がいなくなってしまえば、それは国がなくなるということ。

電話やコンピューターなどの通信機器が今はキャンプ内でほとんど利用できない環境にあるが、次の世代には、それらを利用できるようになってほしいと思う。

カレン青少年機構 (Karen Youth Organization) In Mae La Camp へのインタビュー

インタビュー相手 : Mr. Tamala さん

CBO の立場から見たキャンプの現状、問題点

1. 難民の人々がおかれた状況をどう考えますか。(難民キャンプで特に女性が直面する困難や問題はあるのか。あるとすればそれは何か。)

学校教育を終えた後、仕事を見つけるのが非常に難しい。若者にとって、高校教育を終えたら、

仕事に活かせる能力を身につけるところだが、そのような質の高い教育を受ける機会がない。

2. 第三国定住を推進することについてはどう思われますか。

Tamala さん自身は、第三国定住を望まない。カレンを、自分の家族を、自分のコミュニティを、守りたいからだ。

他の人々もそのように考えているのか？

教育の機会を求める人々、特に若者は、より質の高い教育を受けるために、第三国定住を望んでいる。しかし、それでもカレンのことを、難民キャンプのことを忘れることはない。教育を受け、それを身につけてキャンプに戻ってきたいと考えている。

3. キャンプ内の若者は今後の生活にどのようなことを望んでいるのでしょうか。

CBO (KYO) の活動について

4. 何故 KYO は組織されたのですか。(その背景は。)

Vocational education 職業訓練への需要。

キャンプ内のリーダーが集まり、セクションを形成する(?)

5. 難民キャンプにおいて KYO はどのような役割を果たしていますか。

キャンプ内の若者を組織化する役割を果たしている。

たとえば、集まってフットボールをしたり、リーダーシップ研修を行ったり、料理教室を行ったりなど。他人に頼ることなく何でもできるように、ということでのいろいろな活動を行っている。

(6. KYO は何を目指しているのですか。)

7. KYO のメンバーは、活動中どのような問題に直面するのでしょうか。

今後のことを考えるとき、これからどうしていくかを考えるとき、途方にくれることがある。特に、KYO のリーダーとして、問題に直面する。というのも、若い人々により質の高い、レベルの高い教育が必要とされるが、それを供給する手立てがキャンプ内ではないからだ。

8. KYO の活動は、実際にどのような成果をあげていますか。

キャンプリーダーとよい関係を築いており、信頼を得ている。

9. 今後、NGO にどのような支援を求めますか。現在行われている支援に加えて、何か特に期待することはありますか。

コンピューターをもっとしてほしい。キャンプ内にもコンピューター設備はあり、コンピュータース

キルを学ぶ機会はあるが、KYO 自体にはコンピューターがないので、ぜひあったらいいと考えている。もっとコンピューターを学ぶ機会を増やすためでもある。

その他、様々な物資がもっとあればいいと思う。

10. キャンプの外で活動する KYO とはどのような関係なのでしょう。

キャンプの内外の KYO は互いに頻りに連絡をとりあっている。特に、KYO の本部はキャンプ外にあるから…。

他にも、タイの学生と交流をもつ機会などがあり、タイの学生のキャンプ訪問が行われた。キャンプにいる KYO メンバーも、外の KYO オフィスに行くことがたまにある。

11. KYO のメンバーはどのようにして、様々なトレーニングのための技術や知識を得ているのでしょうか。

学校教育などで学んだことを還元し、活動している。

難民の人々のエンパワーメントという観点から

12. 将来、難民の人々がより自立した生活を送るためには何が重要であると考えますか。

キャンプの外に出ることができない以上、自立的に生きることは難しい。MOI の許可が得られなければ、キャンプにずっといるしかない状況では…。

13. あなた自身は何故 KYO の活動に参加し始めたのですか。

私自身は 2000 年に活動を始めた。今後のために、自分ができるところを探していたからであり、今よりもよりよい (good quality な) 生活に期待し、実現したいと思ったからである。そのため、KYO の活動に参加し、よい指導者になろうと考えた。

14. あなたにとって、KYO で働くことはどんな意味をもっていますか。

目的を達するためにしている活動である。時に大変なこともある。また時にうまくいくこともある。また時に話がまとまらなかったり、混沌とすることもある。

15. 「エンパワーメント」の意味をどう捉えていますか。また、難民の人々へのエンパワーはどのように達成されると思いますか。

エンパワーメントという言葉自体はうまく説明できないが、KYO 内で congress を設置し、今後について、未来について、みんなで話し合いをする場を設けている。

・カレンの伝統文化についてはどのように考えていますか。

カレンの文化を維持していくこと、失わずにいることは重要である。そのために、文化のためのミーティングなどを設けている。

また、ビルマ国内にいるカレンの人々（特に兵士）はビルマ政府、軍を恐れ、カレンの文化を捨てるたり、隠したりせざるを得ない状況にある。カレンであるために過去にひどい弾圧を受けてきたからだ。そのため、カレン語を話さず、ビルマ語を話すしかない。しかしながら、カレン州の村で、カレンの文化、言語を守るためにそれらを教える機会が設けられている。

・ 今後、*KYO*は何を目標としていくか。

薬物濫用へ対処したい。薬物は若者をだめにしてしまうからだ。キャンプ内の薬物へのアクセスを減らしていくことが必要なのである。薬物が減れば、キャンプ内の環境は向上する。そのために、若者をトレーニングし、もし薬物関連の集団が形成されていたらそれを解体させる。

人々は薬物をどのように入手しているのか。

外から売りにくるのである。一応（MOI が？）規制はしているのでそれほど多くはないが、もっと減らさなければ若者がダメになる。

・ 今後、あなた自身は何を望むか。

これまで、ビルマ軍は何度もカレンに攻めてきて、甚大な人権侵害が行われた。

もしできることなら、キャンプに誰もいない状況というのが望ましいはずなのだ。しかしながら、他の国へ行くのもよくない。look down されてしまうからだ。タイの人々がそうであるように。（だから、キャンプから人がいなくなるということは叶わない）なぜなら、我々には国がないからだ。

KYO In Umphiem Camp へのインタビュー

インタビュー相手：Nay Blupaw さん

CBO の立場から見たキャンプの現状、問題点

1. 難民の人々がおかれた状況をどう考えますか。（難民キャンプで特に女性が直面する困難や問題はありますか。あるとすればそれは何か。）

教育に関する点が一番問題だ。将来、教育を受ける機会がない。キャンプの外と接触する機会（＝キャンプの外に教育を受けに行く機会）もない。そのために、仕事を得られない。だから、学校教育を終えたと一日一日をただ過ごすだけになってしまい。

2. 第三国定住を推進することについてはどう思われますか。

第三国定住は特に若い人々にとって望ましいだろう。というのも、キャンプには何の機会もないが、第三国でなら、その先の教育を受けるチャンスがあるからだ。教育だけでなく、仕事や、その他いろいろな機会があり、他の国の一般市民のように生活できるだろう。

もちろん、カレンの人々と離れ、カレンの土地から離れることにためらう人もいる。第三国に行ってもカレンのことを忘れることができないのは当然だろう。

3. キャンプ内の若者は今後の生活にどのようなことを望んでいるのでしょうか。

若者たちは第三国定住を望む者もいれば、自由のために本国への帰還を望む者もいる。ただ、ここにとどまるのはよくない。ここには何の機会も、雇用もないからだ。若者にとっては耐え難い。)

CBO (KYO) の活動について

4 . 何故 KYO は組織されたのですか。 (その背景は。)

KYO が設立された理由は、

教育や文化のために若者を組織する必要があったからだ。というのも、若い人々はいつかカレンのコミュニティのリーダーになる。そのために。(elderly ?)

環境を守るため

カレンがいつの日か独立するため。我々の自由のためだ。

若者がしっかりしなければ、国は発展できない。

5 . 難民キャンプにおいて KYO はどのような役割を果たしていますか。

多くの若い人々を組織し、彼らを正しい方向に導き、立派な人々になってもらうためである。また、政治的な思考も養ってもらい、私たちの歴史について、私たちの国について、私たちの文化について、話し合う場としての役割も果たしている。

(6 . KYO は何を目指しているのですか。)

7 . KYO のメンバーは、活動中どのような問題に直面するのでしょうか。

私たちはしばしばお金や、必要な物資の不足という問題に直面する。また、若者同士でケンカが起これると、KYO がその責任を問われることになる。

その他の点として、KYO のメンバーはみんなパートタイムジョブ、あるいはボランティアという形でこの活動に携わっている。教師であったり、NGO としてであったり、学生であったり、他に本業をもつ人がほとんどである。というのも KYO の活動では給料を払えないから、他に仕事をしないと収入がなくなってしまうからだ。もしメンバーがフルタイムで働けたら、状況はよりよいであろう。

8 . KYO の活動は、実際にどのような成果をあげていますか。

9 . 今後、NGO にどのような支援を求めますか。現在行われている支援に加えて、何か特に期待することはありますか。

これまで、NGO には求めるものを要求してきた。実際、この建物は NGO により建てられたものである。その他、NGO による夏期訓練コースや、ペンやノートなどの学校教材が NGO により提供されてきた。

今後は、ダンスや絵に関する訓練、伝統的文化の訓練などを求めるが、今はまだ話し合っている段階であり、実現するかはわからない。

10. キャンプの外で活動する KYO とはどのような関係なのでしょう。

KYO の本部はキャンプ外にある。イベント時に互いに連絡を取りあっている。時々、連絡を取る上で問題を生じることがあることもある。連絡は通常手紙で、緊急時には電話を使うこともある。また、キャンプ外にいる KYO メンバーが直接キャンプの KYO を訪れることもある。

11. KYO のメンバーはどのようにして、様々なトレーニングのための技術や知識を得ているのでしょうか。

学校での教育や、NGO の提供する訓練により知識や技術を得ている。生活改善やマネジメントに関する訓練を NGO やキャンプの外の人から受けことは私たちにとって非常に役立つことであり、未来にいかすために必要なことだろう。

As to “empowerment” to refugees

(難民の人々のエンパワーメントという観点から)

12. 将来、難民の人々がより自立した生活を送るためには何が重要であると考えますか。

将来的に、仕事や収入につながるような教育、職を得るための機会がなんといっても不可欠である。今は教育の機会、働く機会、出かける機会が欠けている。やりたいことをできる機会を得ることが、より自立した生活のためには重要である。

13. あなた自身は何故 KYO の活動に参加し始めたのですか。

一つには、KYO の目的を果たすため、もう一つは、私たち若い人々がこうした活動に参加しなければ、協力しなければ、という意識があったためである。

実は、KYO は一度組織され、消滅したという過去がある。ビルマにより攻め込まれたためである。

また、私自身に限らず、みんな、キャンプの中でこのような活動に参加する必要性を感じていたはずである。もっと多くの経験をし、若い人々がどのようにあるべきかもっと知りたい みんなにとって、そのような場である。

14. あなたにとって、KYO で働くことはどんな意味をもっていますか。

私にとって KYO の活動は、職場で仕事をするという経験である。どのように人々を組織し、どのように相手を説得し、どのように人々を訓練するか、それを KYO の活動を通じて学んだ。

また、KYO に参加していなかったら得られなかったであろう、キャンプリーダーと関係をもつよい機会に恵まれた。

さらに、かつては人前で話したり、議論したりということが恥ずかしくてできなかったが、今ではそれがどこでもいつでもできるようになった。大きな変化である。

15. 「エンパワーメント」の意味をどう捉えていますか。また、難民の人々へのエンパワーはどのような

に達成されると思いますか。

16. カレンの伝統文化についてはどのように考えていますか。

私たちの文化は、一度戦争で全てダメになった。それでもキャンプの中で私たちはカレンの文化を失うことなく維持している。カレンの食文化や、織物の技術、カレン語など。アメリカ文化、タイの文化など、他国の文化を感じることで逆に自分たちの文化をはっきりと自覚するからである。だから、カレンの文化を失うという心配はしていない。新たな世代の人々も、これまでの人々がしてきたように、カレンの伝統を続けるだろう。

文化をなくすことは、その国の人々を失うことであり、もし文化をなくしてしまったら、それは国家そのものをなくすことになるだろう。

・難民の人々にとって、どのようなあり方が将来望ましいと考えますか。第三国定住か、キャンプにとどまることか…。

もちろん、元々いたカレンの土地に近いタイのキャンプで暮らし、ミャンマー国内の状況がよくなって自分たちの土地に帰るのを待っているのはいいと思う。けれど、状況がよくなる見通しが依然としてないまま、何の機会もないキャンプにずっといるのは望ましくない。キャンプの中でもっと教育や出掛ける機会を得て、まるでタイの普通の市民のように暮らせたら、いいとは思いますが…（それは今は現実的ではない）。

KYO Center in Mae Sot へのインタビュー

インタビュー相手：Lu Doh Moo、Laueh Roland

CBO の立場から見たキャンプの現状、問題点

1. 難民の人々がおかれた状況をどう考えますか。

一番は国の問題である。安心して生きられる国がないということである。そのため、第三国定住という選択肢がある。また、10grade までの教育を終えた若者にとって、更なる教育の機会がないことの大きな問題である。すなわち、勉強を続けることができず、ただ退屈にキャンプで時間を過ごすしかなくなってしまふということである。たしかにある程度の教育は整えられているが、実践的な能力を得るための教育は絶対的に不足している。

機会がなく、キャンプにとどまるだけであるため、非常に早婚であったり、薬物に手を出したりするケースが見られる。（少数ではあるが。）

また、外に出ることが難しいことも問題である。許可が必要であり、出れたとしても1日、2日にすぎない。

これらは多くの家族が直面する問題である。第三国定住を望む家庭は、その理由が「子どもの教育」であることが大部分である。（たとえば、チェンマイの ICFC による難民キャンプに特化した教育など。多くの人が望んでいる。また、Teacher Preparation Course(TPC)などもある。）キャンプ内の教育は短期的に見ればある程度整備されているが、長期的な視点で、将来的に立派な指導者になることを考えると、

より高い教育が必要であり、それはキャンプでは現状として提供されていないものだ。

キャンプ内の薬物の状況についてはどのように考えていますか。

薬物はたしかに問題だが、それは周辺のな問題であり、決して問題の核心ではない。(薬といってもアルコールなどである。)問題の核は、ビルマ国内の状況にあるのであり、キャンプ内で人々が置かれる状況にある。なぜなら、もし難民の人々にも様々な機会 たとえば、他の国の若者がどのように生きており、何を学び、どのように過ごしているのかを知る機会を得ていたら、自分自身に気づく機会を得ていたら、学ぶ意欲、何かに取り組む意欲を得るであろうからだ。しかし、何もすることがなく、限られた空間の中で何年も、同じことをして生きていたら、失望してしまうのが当然の状況だからだ。

2. 第三国定住を推進することについてはどう思われますか。

第三国定住は難民キャンプの問題を解決するためにタイ政府が進めていることである。キャンプで暮らす人々にとって、通常、選択肢は3つである。

本国への帰還

タイ、シンガポールなど隣国へ移住

第三国定住

キャンプができてもう20年以上になるが、ミャンマー国内は相変わらず危険であり、現状では不可能。選択肢にならない。 ×

タイは既に国内に、不法移民労働者問題を抱えており、難民がタイに長くとどまることを認めない方針。これも望ましくない。 ×

よって、タイ政府や UNHCR にとって、これが最もベターな選択肢だということになる。

難民自身にとってはどうなのでしょう。

第三国定住を希望するか否かは難民自身に委ねられている。望む人は、それを自分で選ぶのである。実際は難民のだいたい1/3程度が第三国定住を希望しており、2000人ほどがその機会を求めて待っている状態だ。(特にアメリカへの定住が希望されている。2、3家族ずついろいろな国へ送られるような状況である。)

3. キャンプ内の若者は今後の生活にどのようなことを望んでいるのでしょうか。

もし可能ならば、祖国へ帰りたい 誰もが願うことである。タイでも、その他でも、外国に永遠に生きることは誰も望まない。自分の国で、人間としての存在を認められ、平和で、民主的な社会の中で生きるためである。そのために、KYO はあらゆる若い人々 キャンプ内の若者、キャンプ外の若者、カレンの若者、全てひっくるめて と親密な関係を築いている。

CBO (KYO) の活動について

4. 何故 KYO は組織されたのですか。(その背景は。)

5. 難民キャンプにおいて KYO はどのような役割を果たしていますか。

KYO の活動は主に、二つの部門からなる。

青年教育（学校教育を終えた人々対象）

リーダーシップ研修、マネジメント研修、コンピュータートレーニング、Community Development Program、薬物や HIV/AIDS の awareness 推進、など。

少年少女の教育（10～18 歳の子ども対象）

絵画コンクールや、読み書きに関する活動、カレン文化の保護活動（伝統的ダンスや織物、伝統衣装の子どもたちへの伝授など）

その他、青少年のエンパワーメントや、権利や、民主性、ガバナンス、政治的思考などの知識を共有する場を与えている。また、Karen Union Students Group (KUSG) と交流をもったり、Karen F I Forum に参加するなどして、政治について話し合い、考える、意見を共有する、お互いの状況を理解し合う、こうした経験を若い人々に経験してもらう機会を作っている。（たとえば、ついこの間、カレン州に対して国（ビルマ政府）がまた戦争を始めたが、いったい何故こうしたカレンと国との戦争が起こるのか、など。

こうしたフォーラムは、いわば discuss, negotiate, peace ~、のようなものである。）

（Karen Students Youth Forum では、若い人々が政治的なこと、社会的なことに興味をもつことが目指されている。）

また、国内非難民救済活動として、私的な資金提供者からの支援を IDP に送ることもある。

さらに環境についての活動も行う。（Karen Rivers Watch） 本と DVD 参照

KYO の構造

Central Districts Township Villages（カレン州内の）

しかしながら、ここメーソットにある本部も、一時的なコンタクトポイントのようなものにすぎない。

6. KYO は何を目指しているのですか

パンフレットより

教育及び特別なノウハウやスキルを通じて、心身ともに力をつけてもらうことにより、若者の生活水準を上げること。

若者に、自分自身の責任を身につけてもらうこと。

様々な文化的活動（ビルマの国民性に根ざしたもの）の参加を維持し、高め、促進すること。

現在抑圧されている異なる民族のナショナリティを統一することを支えること。

連邦国家の概念を推進する一方で、ビルマという国に民主性が根付くのを助けること。（ ）

7. KYO のメンバーは、活動中どのような問題に直面するのでしょうか。

法的な効力をもつ証書となるものが何もないことである。つまりそれは安全性（Security）の問題である。たとえば、タイの諜報機関が来た場合、わたしたちはここに不法に滞在していることになるので、

安全ではない。(難民として、キャンプにいるべきなのに、ここに本部を構えて活動している。本来的には許されないことである。そのため、本部のある村のリーダーや住民など周りの人に理解してもらい、不法に滞在することができるようにしなければならず、それが大変である。)

また、KYO で働く人は皆、「働く」といってもボランティアであり、給料が得られるわけではない。キャンプの外で生活での生活もいろいろな意味で大変である。

(収入がない中でどのように食べていっているかといえば、TBBC から秘密裏に食料を届けてもらっている。ただしこれも本来許されないことであり、タイ政府に知られるようなことがあってはならない。)

8 . KYO の活動は、実際にどのような成果をあげていますか。

5 を参照のこと。

9 . 今後、NGO にどのような支援を求めますか。現在行われている支援に加えて、何か特に期待することはありますか。

現状としては、KYO を支援する NGO は数えるほどしかない。というのも、NGO に KYO のことを説明する機会がないため、KYO は右翼的な活動をする青少年団体ではないかと見られてしまうからである。他の国の youth 団体は、しばしば右翼的、軍事的な色彩が強いため、KYO もそうしたものではないかと懸念して、NGO が支援をためらうのだ。

そんな中、支援しているのは...

OSI...青少年エンパワーメントプロジェクトの実施

Coree を通じた UNHCR からの支援...子どものコンクールイベント

Coree だけなら、キャンプ内でしかできないが、UNHCR が関わることにより、カレン州内の子どもにまで支援を届けることが可能となる。

オーストラリアのカトリック教会からの支援 (= "Father Loan")

Private donor

KYO メンバーの友達

誰が支援してくれるかは、活動によりけり。

そのため、今後求めることはより大きな NGO からの支援、コンピューター設備、

Youth のキャパシティビルディングトレーニングの機会である。

資金が限られていることがまた問題。

(10 . キャンプの外で活動する KYO とはどのような関係なのでしょう。)

11 . KYO のメンバーはどのようにして、様々なトレーニングのための技術や知識を得ているのでしょうか。

難民の人々のエンパワーメントという観点から

12 . 将来、難民の人々がより自立した生活を送るためには何が重要であると考えますか。

より自立的な生活のために重要なことは...

1 平和な国（カレンの人々が、平和に暮らせる自由な国） 民主的な政府 自治

しかし、これが叶わない場合には、

2 タイで難民としての身分の保証を獲得し（=身分証明書を得ること）

教育、職などの機会を得ること。

3 第三国に定住し、市民権を得ること。

ただし、タイ政府の難民に対する政策方針は、厳しい。難民の協定に決してサインをしないのだ。どういふことかという、難民キャンプに住む人々のことを難民だと認めず、ただ「一時的な移住者」（Displace People）と見なしているため、権利が保障されていないのである。

ビルマ国内の政治体制が変わらない限り、難民の問題は解決しない。（！！）

タイ政府は難民をできるだけ他国へ送ろうとしているが、一方でビルマ内国境周辺には難民キャンプで住むことを望む人が今も多く集まってきている。今年も、新たに 2000 人の難民がキャンプへ非難してきた。

13. あなた自身は何故 KYO の活動に参加し始めたのですか。

高校教育を終えたが、政治的な教育、自分たちの歴史に関する教育は何も受けなかった。その後、教師になったが、子どもたちは勉強に興味をもたず、民主や権利という意識ももっていなかった。キャンプでの長期間の生活は、若者を失望させてしまうのである。私の KYO への活動は「なぜ」という問いから始まった。2002 年に KYO のメンバーになったのだが、失望している若者たち、もう何も学びたくないと感じてしまう若者たちがいる中で、自分がいい見本になればと思ったのである。（Lu Doh Moo）

97 年に村単位の KYO 活動に参加し、その後、地区レベルそしてこの本部と活動の場を移してきた。その背景には、若者には常に自分の国のための責任がある、カレンの人々、カレンという国家のためによいことをしなければならないという信念があったからである。（Laueh Roland）

14. あなたにとって、KYO で働くことはどんな意味をもっていますか。

KYO の目的を、実現することである。この目的の背景には、カレンの将来を担う若者意識や能力を高めることがある。KYO での活動は、自分自身の成長のためであり、他のカレンの若者の成長のためであり、カレンのコミュニティの成長のためである。（Lu Doh Moo）

KYO は、カレンにとって、非常に重要な役割を果たしており、将来さらにその重要性が増すだろうと信じている。国にとって、世界にとって、いい若者がいなければ、いい未来は築けない。若者未来のために必要不可欠な存在なのである。いい指導者を育成するための、いい組織をつくるための活動、それが KYO で働くことの意味である。

National Council Union of Brume (NCUB) のプログラムで、アメリカへ三ヶ月のインターンシップに参加した。NCUB はオランダ系の NGO で、パスポートを模造して、海外へ行くことを可能にした。海外で、政治的な意識が高く、学問への意欲も高い学生に出会い、話をしたりすることを通じ、キャンプ内の生活と、他の国の若者の生活がどのように異なるのか、なぜキャンプ内では学問への意欲が低かったのか、などを客観的に考えるようになるとともに、民主制、ガバナンス、国際政治などへの関心が高まった。

15. 「エンパワーメント」の意味をどう捉えていますか。また、難民の人々へのエンパワーはどのように達成されると思いますか。

・ カレンの伝統文化についてはどのように考えていますか。

自国の文化を守ることは重要である。なぜなら、文化を失うことはその国民性を失うことであり、すなわちその「国」を失うことだからである。文化を維持するために、カレン語を読み書きする教育などを行っている。伝統芸能てきなものはたしかに衰退しつつある。たとえば衣服にしても、欧米の影響を強く受けている。しかしこれはカレンに限ったことではなく、グローバリゼーションのあおりであろう。